楊一雄全集——第一卷

雄全集 I

筐（はなかたみ）

久の夕映え

新潮社版

檀一雄全集

第一巻

© Yosoko Dan, Printed in Japan, 1977.

印刷　1977年9月20日
発行　1977年9月25日
著者　檀 一雄（だんかずお）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社 新潮社
郵便番号 162
東京都新宿区矢来町71
電話東京 266－（業務）5111（編集）5411
振替東京 4－808
印刷所　二光印刷株式会社
製本所　神田加藤製本株式会社
2200円

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

此家の性格　9
退屈な危惧　25
美しき魂の告白　37
衰運　55
帰心　69
花筐序　83
花筐　89
夕張胡亭塾景観　113

逗留客 139
樹々に匐う魚 147
漆黒の天国 159
魔笛 165
冬の瓦 189
吉野の花 201
母の手 209
孤独者 221
少年 227
芙蓉 237

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

夕べの雲 247
裾野少女 261
出生まで 271
最後の狐狸 283
後生安楽 297
佐久の夕映え 311
埋葬者 349
白雲悠々 373
解題 386
「此家の性格」について 392

檀一雄全集

第一巻

花筐（はなかたみ）・佐久の夕映え他

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

此家の性格

薄暗くなると一緒に、母は朱塗の鏡台の前でケバケバと化粧をした。楽屋をちょいと覗いて、いつもあの花道の上の特等席に陣を取ると、母は朝日をふっとふかしたりして僕はおびえるように脇にかしこまるのだった。金一封、檜様より竹の丈に差下さる——長くこう叫ばれると嫌な気がしてまともに母の顔が見られなかった。はねると楽屋裏に廻ったり、又時には竹の丈が僕の家のお茶によばれたりするようになった。其の頃から僕は竹の丈をオジさんと呼び習わされて、一座が引上げる時には隣町迄母と見送りに行ったりした。

竹の丈の一座は冬毎に来るようだった。村中噂が立って僕は竹の丈の生ッ白い顔を見るといつもにがにがしい思いがした。丁度、其の年もこの一座が旧正月を当てようというので家の餅搗きにはこの男も加勢に来た。永い不行跡の後で行衛を失うていた父が北海道からひょいと戻って来たのは其の日だった。変なはしゃぎようをしていた母も、ひどく吃ってたすきと尻っぱしょりをおろしては不安そうにパタパタ玄関に立っていった。僕はおこわを噛みながらおびえていたが、竹の丈はそれっきりだった。きつい吃りで物のよう云えなかった母は、それ以来殊更口をきかなくなり、酒を飲む父を座敷に置いた儘一人でシンと米をとぐのだった。父は何も噂を知らず日益に威猛高になって一家は父の下におびえるようだった。

其の頃から家計は傾いて行った。崖続きの櫟山一町歩が長く床に就いていた祖父の死後間もなく売られて行った。豚飼えばひどうもうかるという話を母が聞きこんで来て父の心を唆るようだったが父は口をひんまげた儘動かなかった。それで又、村境にもっていた三四段の島畠も見放さねばならなくなった。

竹藪がざわめいて変に心細い毎日だった。父は相変らず紹の羽織を着込んではよりのある毎に顔を出しきっとひとかどの意見を吐いて来るようだった。羽虫の入った廊下を父のミシリミシリという跫音が過ぎて行って、母屋に寝っている僕はいつもそっと首をちぢめた。親達のそういうね

じれた雰囲気の中で、僕は卑屈に育っていった。
何時の頃か架設された鉄道が白いブリッジの上をゴウゴウ駆けるとこんなものに乗ったことがなかったせいか、無性に恐しかった。空が染まって、とんぼを追うてはあの丘の辺迄来ると、胆をつぶすように物凄い音を立てて汽車が走り過ぎたりした。僕はヒイヒイ云って泣いて帰った。父はそんな時黙って見返すばかりで泣いた理由がこわくてよう云えなんだ。
それでも機嫌の良い日で父が珍しく僕に相撲をせぬかと云うこともあった。僕は父の筋骨の硬い足にしがみつき荒い脛毛に食いついて息の切れる迄押しかかったがピシャリと投げつけられる許りだった。熱して火のつくような気持で挑んでゆくと父は僕の膝をはらって青畳の上に嫌という程投げとばした。母が側で負けてやれと云うと却って父は僕の足をはらい脛一杯がすり切れて、ただわめくように泣くばかりだった。うらめしい気持が去らず、僕はそれ以来恐ろしくて父に手向えなかった。
僕はいつも父の目を逃れるように生きていた。母屋が広くて夜は殊に暗かった。この不味い生活の周囲に五位鷺が裂くように叫ぶ。その脅迫するような啼き声の断続するのが判っきりと僕の脳裡に刻まれるのだった。
布団を深くかぶっておびえながらホッと寝入る。そんな夜も又無慈悲に五六度厠に立たせられた。うずくような夢の中にふと小便を催して来、どうにも耐えられなくなっては走り出し、ああ良かったと庭の籬に心地よくジャーッとひっかけたと思うと、それが布団の中でもう背から腰にかけてジュクジュクしめって来るのだ。大きい幻滅のなかで狂気のように悲しかった。音のせぬようにそっと寝巻で拭ったり、尻を当てて温めて見たりしたが、それは朝迄乾かなかった。母が起しに来ても起きれなかった。又かと父は布団を一杯に剝ぎ、身に浸む寒さの中で裸の儘僕は布団の上にすくむのだった。父は僕のエリカミを掴むと円くにじむ小便の上に鼻頭をこすりつけ、むれた小便のにおいは終日頭を去らなかった。
冬が深く寝小便は毎夜だった。飲物が禁じられ目をぬすんで汲桶に頭をつっこんで水を飲む間も父の又水又水という声が其処ら一杯鳴る気がした。然ししまったと思うひとう時前の寝小便はとろかす程心地良いものだ。籬にひっかけた夢を見るかと思うと、今日は裏の葱に、橋の上から澄んだ小川の中に。

こんな事があった。豆腐屋の源というのが僕に怪我をさせてあやまりに来、母がそれをなだめている時、父は歯ぎしりしたと思うと僕の止めるのもようきかず、いきなりな

ぐりつけるのだった。其の夜烈しく戸を叩く音がして母が母屋の戸を開けると酔った源の親父が旦那を呼んでくんなと父を誘い出し、三郎を使いに遣ったが父は用事があるとて帰って来なかった。翌朝不図目覚めて見ると父は母の襟首をもって床に据えつけているようだった。母の裾がまくれついぞ見たことのない白いふくらはぎが覗き、この売女奴がと酔いほうけた父の声も顫えていた。僕は尻にしめってくる寝小便の上でじっと唾を飲んだ儘動けなかった。

息づまるような空気が家の底に流れて僕は誰にも物が云えなかった。昼膳を立てて三郎が父のはなれに持ってゆくと、急に父の激怒した声が聞えてきて母屋に仁王立になり母の髪を掴んでは引き廻した。母の袖がもぎれて泣き出す母の頬を、父はビシビシなぐりつけた。父の筋骨が顫えて、はては乳房を引っぱり出し母の着物を尻迄まくりあげてエイエイ折檻するようだった。仄暗い部屋の中で母の太股が残酷にふるえ、母はいぎたない叫び声をあげては逃げ廻った。こわいながらもこの両親の醜い争いは僕に不思議な興奮を湧かすのだった。

不意に父はタルキに吊ってある曾祖父の槍を外して母の腹に据えた。帯がとけて母の浴衣が腕迄ずれ、父はそれを槍でつっかけると母を素裸にしてしまった。母は狂気のように庭に飛び下りた。父は槍を畳にたてて、一俊良く見ておけと云って其の儘はなれにひいた。涙のせきが一気に落ち僕はワッと母に抱きついた。母の皮膚がヒリヒリ痙攣して母はもう黙っていた。

終日父は酒をあおり、母は鏡台のある二畳に引いていたが、仄暗くなると母屋の下の土間に出て、一心に薪を割るふうだった。ふと鉈がそれ、鮮かな血がにじんだと思うと、母の顔には何かきつい決意めいたものが浮ぶのだった。僕は縁の上でそれが怖しくてよう見られなかった。僕は烈しく三郎を呼び、三郎は僕を肩車にのせて檜垣の家の外をぐるぐる廻るのだった。

母が自殺したのはそれから数日と経たなかった。山番が駆けつけ、僕が三郎の肩車にのって裏山の赭土のガケを登ってゆくと、うしろから父のハッハッという息使が聞えて来て、其の儘二人だけつき返され、ただ崖を走る父の荒い息が執拗に僕の耳に残った。

それっきり父は母の事をひと言も云わず崖の下に葡萄の苗を植え、山を開いては梨や杏子の栽培を試みて、二三年父はしきりに果樹の本を読んだりした。僕は三郎と其の頃加勢に来た玉に頼りきりで、滅多に父と物を云わなかった。お玉の部屋はむれるような女のにおいで、夜は油の浸んだ下等な色刷の本を読んでいた。お玉に抱かれるのはそれでも一番楽しいことの一つだった。そのうちお玉は変な笑い

ようをするようになり、目に見えて白く太って来て、何時の間にか姿を見せなくなってしまった。
はらんだという話だった。それが父だという噂もあった。僕はお玉の行李から盗み出した赤緑のけばけばしい本を其の後長く倉の中で一人眺めたものだ。

其の頃小作の仙が永年納米もせず、家賃も払わぬからというので父は田から仙を追うと云った。仙と兼が代る代る泣きついて来て、其の年の暮には米五俵が倉に納められた。父は俵を出させてサジをぐいと挿し込むと、米が痩せている上に石が混っとる、粒乾もよく知らん奴に田はたのまれぬ、とどなった。兼は小作の吉や熊らとあやまりに来たが、父は古い美濃紙に書きつけた永年の家賃の書付けを出して、これを払ってもらわにゃ家をとくと云うのだった。
仙も兼も来なくなった。父は大金鎚や鉄棒を提げ、嫌がる三郎を連れて、仙の家の壁をはがしに行った。その杉板を車に積んで帰って来ると、よう乾れとるといってそれで風呂を焚きつけるのだ。誰も黙ってしまって、三郎は父の云うなりどんどん板をくべた。父は一番風呂に入って、ええ風呂じゃ隣の人にもらいに来るよう云うてやれと云った。ブラブラの一俊なぞそのうち勘当するから、おまえ家に入らぬか、などと馬鹿正直の三郎に虚勢をはる父の前に、知らずにひょいと出たりすると父の口はいつもひりひりゆがんだ。三郎は父の本心と虚勢との見徹せぬ間でおどおどするばかりだった。
仙は村境に引き移って桶直し業を始めるようだった。其の夏川下一帯ひどい腸チブスが流行り、あちこち男や女が死んだ。父は一々食物の菜を自分で検査し、後には家中の者に梅干だけで飯を食わせることにした。チブスは一向に下火にならず精霊流しの頃には、全村から三四十人避病院に廻された。
ドシャ降りの晩だった。門の辺りにわいわい人声がするようで雨戸にバタバタ石が投げつけられた。檜を殺せ、という烈しい声が雨に混っている。父は垂木の槍をキリリとしごいて雨戸を蹴破ると何を血迷うとるかと外へ出て行った。ワッと逃げる声がする。三郎提灯を持てと父の呼ぶ声がして、廊下に立つと提灯は雨に流れた。私の足許にもサッとしぶきが飛んで、足腰じゅっくり濡れたことを覚えている。
それでも暴徒が去ると父は三郎に水を汲ませ、腰の弱い奴等めがと足を洗わせるようだった。その足が不思議に痙攣した。大方分っとるのだ、仙にちがわん——ぶつぶつ父が云うのを三郎は見上げながらそんなことはねえ、仙さんなんてことは、と答えるのだった。

翌朝が大変だった。路に大きな棺桶が置いてあると云うのだ。僕は父の後を追うて踏石伝いに門に走った。門は石で叩きほがされ、塀は泥まみれになっていた。濁水にそこここがひどくよどれて、人の踏み散らしたぬかるみの中には成程棺桶が置いてある。父はそれを蹴飛ばした。すると棺はどっと転がって泥水を含んだ前の濠に落ち込み、一つ二つ揺れたと思うと水面にぽっかり死体が浮び出した。よく見ると仙に嫁いでいた兼のようだ。僕はたまらない恐怖で父の足下にすくむばかりだった。父は三郎に駐在へ行けとどなり、それでも顔一杯きつい汗をかいていた。雨雲の去らぬ暗く烟った空と、嵐にひしがれた草の間を、濁り切って流れている水の中の兼の死に顔は、僕の胸に永く錆ついて離れなかった。

仙は引かれて行ったという噂だった。チブス患者の死体を一緒にかついだ咎で熊も共に引っぱられ、永いこと出て来なかった。僕は怖しくて其の後ずっと村の衆に顔が合わされず、父も二三日じっと動かなかった。

然し思いがけなく僕の債券が三千円に当った。父はあちこち忙しそうに出歩くようで、それ以来又急に鼻柱が強くなった。キツい性格で、人を罵倒しておいて、何かと村の事に口を出し、それでもいつの間にか、父は不思議に押えの利くふうになっていた。古い家の誇りで、角ばったなりをし、言葉を張り嫌われもしたが、家財の窺われぬ父の態度で、変に畏れられてもいた。

風が雑木を吹きちぎり、村の子供達が裏山の栗を折りに行っては父から折檻され、その都度栗枝を父は不機嫌に抱えてきて、山を荒してならんと風呂の薪代りにしたりした。裏の葡萄棚の組竹が夜毎にキシって、霜柱は赭土の上に白い縞をつくり鋭い北国の気魄が総身に感ぜられた。家屋が低く、妙高オロシがキツくて誰も皆せまい境涯のなかに頑な性格をといだ。だから此の村の祭は男衆の血走った威勢で生木を裂くように烈しいのだ。

其の年も例年の大焚火があった。村の若衆が揃いのハッピを作るからとて寄付を申込んできて、それでも父は知らぬ顔だった。村会議員だった父の仕打が癪にさわったのか、村の男衆も裏の旦那を村会から追出せとか散々の陰口もあり、其の頃丁度南米帰りの畑中の旦那に頼めという始末だった。金縁の眼鏡をかけて俄成金の畑中は村の行事毎に仕掛花火など色々派手な寄付をした。

ハッピが出来て、殊更村会議員というので半分あてつけの意味も含まれ、衣裳調べの招きには父も招待され、ひどく腹を立てて帰って来た。父は家だけ別のハッピを作れといって三郎を使いにやり、S町に相当金をかけて、僕と三

郎の並はずれなこった揃いを註文するのだった。

十日の夜が来た。霜のキリキリたった寒さの中に、父は僕と三郎にこの衣裳をつけさせると、嫌がるのを無理やり引出すのだった。仲間はずれの白いハッピが総身に喰い入るように感ぜられ、僕も三郎も一座の白けた中にぶるぶる顫えていた。室川にはもう堆高く青竹が組まれ、藁や石油を抱えた揃いの男衆が合図の狼火をドンと打揚げると、組竹には一勢にもう火がつけられた。

青竹がはじいた。十把百把の薪がメラメラと燃える中に、投げこまれる銅屑や花火が鮮かに散った。誰の顔も仁王のように照って、豆をいるような竹節のはじく音と一緒に、威勢よく菰かぶりの栓が抜かれた。炎は風の中を東に西に揺れる。男衆はその炎のぐるりで柄杓ごとじかに酒をまわして、父もグイグイ冷酒をあおるようだった。

まだ神官ののりとが済んでいなかった。側に源の親父が来ると父は変にからみ、酒を一杯ずつさしかわして何か口ぎたなく罵り合うと思う中に、川の大石を拾いあげてハッシとたたきつけるのだった。眉間が割れて、黒い血がふき出た。村の衆が止めるのも、父はきかなかった。引抱えてゆかれる源の親父のクタバレという声がきしるような不気味な音を立てた。

座は白けて行った。父はその真中であおるように酒を浴び、フイと尻をまくって、尻あぶって百迄とどなるのだった。皆んな黙った。父は、赤くやける火をうしろにぼんやり立った村人の前で、おどすようにヒヒヒヒと笑いつづけた。僕は父の股の下からよれよれの兵児と、父の皮肉と、たるんだ尻の筋肉を覗いて、終生助からぬ嫌な気がした。

今年は梨の初成りだ。今年は桃に実がついた。

こうして裏の果樹が大きくなるにつれて、父の鼻は益々鄙古び、顴骨は赭黒くつき出て、かくすことの出来ぬ年が父のひたいに皺をよらせて行った。思い出したように、父は豚を飼ったりして家計は持ち直すようでもあった。然し家のうしろ一杯が豚のスイた臭いでうもれ、裏の旦那も落ち目だという声が村中に聞かれた。

父は三郎に車をひかせ、畜産展に出かけて行っては豚を載せて帰り、自分でかこいの杭を打ったりしていた。そんな時物淋しい秋の光がハスに父の肩を切って、父の寂寥がくっきりと僕に感ぜられることもあった。

豚は年毎に殖えて行った。僕はその粗い毛を覗いていると後から来た父も何かなし北叟笑むようで、一つ倉の普請もせねばならんと云うのだった。右手の土蔵が毀され、父は其の上に色々設計をこるようだった。その倉の窓を後々何にでも使えるように大きくしたが良いと僕の云ったのに、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.